

2020.08.23

【キリストと生きる】

ローマの信徒への手紙 6 章

6:1 では、どういうことになるのか。恵みが増すようにと、罪の中にとどまるべきだろうか。

6:2 決してそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中に生きることができのでしょうか。

6:3 それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。

6:4 わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。

それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。

6:5 もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。

6:6 わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。

6:7 死んだ者は、罪から解放されています。

6:8 わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。

++++

前の章にあった「5:20 律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました。」を受けて、それなら恵みが増す味わえるためにもっと「罪を犯した方がよいのではないか」とうそぶく人たちがいたのでしょうか。

パウロはその考え方を戒めています。

1) 洗礼の意義

パウロはここで「洗礼」について語っています。洗礼とはイエス・キリストに結ばれ、キリストの死と復活を共有するための儀式であることが教えられています。

私がイエス様を救い主として信頼し、洗礼を受ける時、それは「わたしとイエス様とが結びつき、イエス様の十字架の死の中に私の死が、そしてイエス様の復活の中にわたしの新しいいのちが結びついて、洗礼を受けてから、私は「イエス様の死とイエス様の復活をとおして、あたらしく作りあげられた存在」として生きようになるのです。

2) 洗礼を受けた自分自身

洗礼を受けたことで、自分自身に力がつくわけはありません。

自信満々に生きられることもないと思います。

でも、神様の側での見方が大きく変わります。

「御子イエス様にすっかり覆われ、すっかり抱きしめられ、そのお方の死による罪の赦しと復活による死に打ち勝つ力を秘めた存在」として生きられるようになるからです。

自覚は、少しずつ変化してくるでしょう。

でも、当座はあまり、自分で何かできるとか、変わるとかいうことはないかもしれません。

ただし、大きく変わる部分があります。

それは「罪の奴隷」から解放されているということです。

今までは、なんでも自己中心的な価値判断をしてきた私たちが「イエス様ならどうするかな」とか「神様がどう考えているのかな」とかそういう判断をどんどん心の中に取り入れることが始まるからです。

しかも、それを嫌々ながらではなく、きわめて自然に「神様が喜ぶことをしたいな」とか「神様を感じながら生きたい」と思えるようになってくるのです。

この際、私たちの傾向としては、神様を喜びたい意識が強過ぎて「極端な価値判断」をしてしまう傾向があるのです。

これは絶対ダメ、こんなことをする自分は出来が悪すぎる、などなど。

ここにまた落とし穴があります。

キリストの中に生かされている私たちは、基本的には、ありのまま「赦されて」います。失敗も含まれたまま、弱い面、頑固な面が含まれたまま、神様は私たちを愛してくださっています。

無理に自分を変えようとすると、そこには正義感と頑張りだけの利己的価値判断が生まれてしまいます。

力まず、無理をせず、まずは、自分自身を受け止めて、そのまま神様の前にのびのび生きることの良いのです。

### 3) 変化はどこに

ふと、ザアカイという徴税人のことを考えていました。

彼は町で評判の悪い人でした。でも、イエス様と出会い、「ごめんなさい」が言えるようになりました。

そして生活を改める覚悟をイエス様に話しています。

でも、彼はその仕事を辞めたのでしょうか。

おそらく辞めることはなかったと思います。そして昔の仲間たちと、それまでと同じように普通に徴税人として、前よりは幾分正直に、そして丁寧に人と接しながら暮らしたのではないかと思うのです。

つまり、救い、洗礼、キリストとの生活というのは私たちを聖人君子として整えるというより、むしろ、普通の人、社会に生きる普通の人として、しかもキリストに愛されていることを知っている普通の社会人として生かすことに意義があるのではないかと思うのです。

聖人君子になれば、すごいことです。それを目指すことも悪いことではないでしょう。でも、私たちの多くは日常的な仕事があり、社会の中で生きなければなりません。

人との関わりや交渉や駆け引きも大切になってきます。その際、キリストに愛され、キリストに赦され、キリストのいのちに生かされながら生きている存在であることを自覚できたら、それまでの心細さとは雲泥の差がうまれます。

どうしても利己的価値判断を下す傾向は残っているのですが、でも、キリストによる愛と赦し、そしていのちへの意欲は、それらの影響力よりも強く私たちに働きかけてくれるのです。

つまり、失敗もあるし、悩みもあるのですが、キリストの愛と赦しといのちは、そういう私たちを丸ごと受け止め、受け入れて、「生きるを励まして」くださる力となるのです。

人生にはいろいろな時があります。

でも、それはキリストの愛に包まれ、最終的にはいのちに至る状況に置かれている私たちの「時」なのです。どんな時がやってきても、簡単に利己的価値判断をせず、神の愛の手の中に生かされている私の「時」として捉えてほしいと思います。普通の人として家庭で、社会でいながら「神の愛の手の中に生かされていることを感謝する」それが洗礼における原点なのかもしれません。神はすでに、私たちがどれほどダメでも、神の民として愛し、赦し、そして見ていてくださるからです。安心がそこにあるのです。